

重信川流域におけるカワウの個体数変動

上沖正欣^a・高橋良太^a・高橋淳^a・小川次郎^b・山本貴仁^c

(^a愛媛県立松山中央高校・^b愛媛大学大学院連合農学研究科・^c愛媛県総合科学博物館)

演者らの所属する松山中央高校バードウォッチング部は、過去 16 年間にわたって重信川流域の鳥類を観察してきた。今回は、その中でも特に興味深い動きがあったカワウ (*Phalacrocorax carbo hanedae*) の観察記録を抽出し、個体数変動を報告する。従来、四国においてカワウは冬鳥とされ、個体数も少なかった (石原, 1982; 日本野鳥の会徳島県支部, 1987)。しかし、1990 年頃から県内でも比較的大きな河川の河口で群れが見られるようになり、現在では松山平野において重信川河口を中心に 200 羽前後が越冬している。今までのところ、重信川周辺でカワウによる内水面漁業等への被害は報告されていないが、他地域と同じような問題が今後発生する可能性は十分にあり得る。そのため、現在の動向を把握する事は、それらを予測し、対処するのに有効であると思われる。重信川流域におけるカワウの個体数の記録については、部活動の記録と併せて、日本野鳥の会愛媛県支部の河口部での調査データ (岩本ほか, 未発表) を用いた。

カワウの増加は重信川河口で 1991 年から始まり、当時は 7 羽が確認された。中流域では 1994 年 1 月に初めて越冬個体が記録された。また、同月に河口部で記録された最大個体数は 40 羽であり、この数はシーズンを通しての最大個体数とほぼ同じであった。中流域ではその後、冬季は毎年観察されたが、個体数は 5 羽以下だった。河口部での越冬個体数が 100 羽を超えたのは 1996 年 1 月からである。個体数は中流域及び河口部とも次第に増加し、2001 年 12 月には中流域でも 70+ 羽を記録した。中流域で観察されるカワウのうち採餌を行うのは一部の個体で、ほとんどが移動中の個体であるが、これらの個体数が増加していることは、河口部の集団が行動圏の拡大を始めたことを示していると考えられる。中流域及び河口部でカワウが主に観察されるのは 9 月から翌年の 4 月にかけてであり、出現頻度と個体数は 11 月から翌年 2 月にかけて最も多くなっている。

重信川流域における最大個体数が 200 羽に達してからは、観察される個体数が安定してきているが、それと同時に周辺の溜池やダム湖での観察記録が増えるようになった。これは、200 羽程の個体群を重信川流域だけでは維持できなくなったためと考えられる。さらに河口部では 1997 年から、中流域でも 2001 年 7 月に越夏個体が確認された。いずれも 10 羽を超す記録は無いが、越夏個体も年を追うごとに増加傾向にあり、2002 年現在では河口部で 7 羽程が確認されている。繁殖についてはまだ確認されていないが、夏季に複数個体が確認されていることなどから、将来は松山平野周辺での繁殖の可能性もあり得るだろう。今後もカワウの動きに注意して重信川流域の鳥類を調査していきたい。

カワウの最大個体数

